

# 始　　まり

早川満寿子

保育に携わる者にとってこの一年の流れはどこで始まりどこで終わるのか。四月が始まりで三月が終りと、そんなこと、当り前なことではないかといわれそうだ。四月で始まった一学期は、七月に来る夏休みが一区切りともいえる。冬休み春休みも、また同じようである。その間に、始まりと終りが繰返される。いや一ヵ月が一区切でその中に一週間があり、もっと身近にこの一日の始まりと終りがある。この一日の短かい時間の中でも、同じような始まりが幾重にも繰返されるのではないか。

子どもたちの動きの中では、初めての発見や経験が折り重なって成長を組

み立てている。子どもにとって出会いとか、発見とか、創造によって得るものは、その瞬間からすべて始まるし、次の経験と重なり合って、終りを知らない。だからこそ、大胆に活動し表現できるのであろう。いつも誰かがやっている「泥んこ遊び」を例にとって見ても、遊び始めたら最後で、終りを知らない。きれいに丸められたおだんごを、順序よく並べて悦に入っている子どもに、いたずらっ子が近づいて、そのおだんごを力一杯踏みつぶしてしまう。一瞬の中に心こめて作ったおだんごは崩れて消えてしまう。子ども同志のいい争いがしばく続くけれど、その崩されたことが動機となって、もっと

固い、もっと素晴らしいおだんご作りへと、終りを知らない活動が始まるのである。またこわされた動機は、全く新しい活動新しい発見へと子どもを動かす。友だち同志の初めての遊びも生まれて、楽しい遊びの始まりにもなるのだ。大人はなぜか始まりとか終りとか、区切りしめくり等を、ことさらつけたがる。一日、一週間、また一か月の、その始まりがずっと後までの影響を及ぼし、すべてを決定してしまうかのように思ってしまう。

子どもが生きている現実の中では、いや人間が生活して行くと言うことの中には、「始め」は「終り」の中にすでに、ずっと前から胎動しているのかもしれない。「始め」は「終り」であり、「終り」は「始め」なのである。

(相模原市 翠ヶ丘幼稚園)